

同性愛者のアイデンティティはどのように検討されてきたのか

—経験的研究の領域横断的なレビューを通じて—

* 島 袋 海 理

1. 問題の所在
2. 社会空間と同性愛に関する研究におけるアイデンティティ
 - 2.1. 家族におけるアイデンティティの抑圧
 - 2.2. 学校におけるアイデンティティの抑圧
 - 2.3. 同性愛コミュニティにおけるアイデンティティの受容
 - 2.4. 小括——「各社会空間におけるアイデンティティの抑圧／受容」という視座の限界
3. 同性愛アイデンティティ形成研究の視座とその限界
4. 同性愛者のセクシュアル・アイデンティティ形成研究の可能性
5. 結語

1. 問題の所在

本稿の目的は、同性愛者のアイデンティティが日本の経験的研究⁽¹⁾においてどのように検討されてきたかを明らかにすることにある。そして、これまで展開されてきた同性愛者のアイデンティティ研究における課題を指摘し、それを乗り越える研究設計として、セクシュアル・アイデンティティ形成研究を提案する。

日本の同性愛研究においてアイデンティティというテーマは、常に主題の一つであった。同性愛者のアイデンティティの理論化が日本でいかに展開されてきたかをレビューした島袋（2022a）によれば、現行社会における異性愛規範や同性愛嫌悪がいかに対抗するかという問題意識から、研究者はアイデンティティに政治性を見出すか否かをめぐって議論してきた。しかし、どのようなアイデンティティが政治的有効性を持つかという観点から行われた一連の理論化は、社会的世界を生きる同性愛者個々人のアイデンティティの実態を見落としてきた点に課題が残る（島袋 2022a: 97-8）。

こうした課題を踏まえたとき、同性愛者の実態に経験的に迫った研究がアイデンティティをいかに検討してきたのかという問いが浮上する。だが、こうした経験的研究を領域横断的にレビューする試みは、管見の

限りほとんどない。先述した島袋（2022a）はアイデンティティの理論的研究をレビューするに留まっており、経験的研究をレビューした田中（2018）、高藤・岡本（2018）はどちらも心理学領域における研究のみを取り上げている。また同性愛者のセクシュアリティ研究を領域横断的にレビューする有馬・園田（2010: 91-2）は、レビューにおける3つの視点の1つとして「アイデンティティの視点」を設定している。しかし、欧米の同性愛アイデンティティ形成研究（本稿3節でも紹介）の紹介に紙幅が割かれており、日本の研究はほとんどレビューされていない。総じて、同性愛者のアイデンティティに関する経験的研究を、幅広い研究領域を横断して動向整理する試みは、これまでのレビュー論文の空隙となっているといえる。

そこで本稿は、同性愛者のアイデンティティが日本の同性愛研究においていかに研究されてきたのかを、経験的研究のレビューを通じて明らかにする。その際、研究領域を社会学や心理学などにあらかじめ限定するのではなく、なるべく広く設定する。こうすることで、これまでのレビューに欠けてきた領域横断的な動向把握を目指す。

本稿の構成は以下の通りである。まず、家族や学校といった社会空間と同性愛をテーマとする研究に着目し、そうした研究においてアイデンティティがいかに検討されてきたかを整理する。そのなかで、複数の社

* 名古屋大学大学院学生

会空間を横断しながらアイデンティティを形成する同性愛者の姿が検討されてこなかったことを確認する(2節)。続いて、同性愛者のアイデンティティへの意識の推移をモデル化する同性愛アイデンティティ形成研究の動向をレビューし、同性愛アイデンティティ形成研究がアイデンティティの多様性や流動性を捉え損ねてきたことを指摘する(3節)。そこで、この課題を乗り越えたと期待される、セクシュアル・アイデンティティ形成研究の視座を紹介する(4節)。最後に、知見を整理し、今後の展望と残された課題を述べる(5節)。

2. 社会空間と同性愛に関する研究におけるアイデンティティ

本節では、社会空間と同性愛をテーマとするこれまでの研究において、アイデンティティの問題がいかに検討されてきたのかを整理する。なお本稿では、社会空間と同性愛をテーマとするすべての経験的研究を取り上げるのではなく、アイデンティティについて分析あるいは言及のある研究のみを取り上げることにする。

本稿は家族、学校、同性愛者の集うコミュニティ(以後、レズビアン・コミュニティとゲイ・コミュニティを区別せずに用いる場合、単に「同性愛コミュニティ」と記す)の3つの社会空間に焦点化する。個人が幼少期に経験する「第一次社会化」の舞台としての家族、そして「すでに社会化されている個人を彼が属する社会という客観的世界の新しい諸部門へと導入していく」(Berger and Luckman 1966=2003: 198)「第二次社会化」の主要な舞台である学校は、アイデンティティ形成に大きな影響を与える。また、後述するように、同性愛コミュニティがアイデンティティ受容と深く結びついてきたことを、多くの研究が指摘している。そこで本節では、家族(1項)、学校(2項)、そして同性愛コミュニティ(3項)の順に、各社会空間と同性愛をテーマとする経験的研究においてアイデンティティがいかに検討されてきたのかを整理する。

2.1. 家族におけるアイデンティティの抑圧⁽²⁾

家族に注目した同性愛研究は、定位家族が同性愛者のロールモデルとなりえないと指摘してきた。マイノリティ・グループとしての同性愛の特徴について検討した心理学者の石丸徑一郎は、同性愛者は他のマイノリティ・グループと異なり、定位家族からの支援が得られる場合が少ないと分析する(石丸 2008: 31-3)。同性愛者の多くにとって定位家族は、エスニック・マイ

ノリティなどと違い、クローゼットに押し込められる異世界として経験される。また、親に自身が同性愛者であることが発覚し、アイデンティティを否定される事態に直面した同性愛者の経験も石丸は報告している(石丸 2008: 73-5)。概して異性愛を前提に成立する定位家族は、同性愛者の子どもにとってはロールモデルになりえないどころか、アイデンティティの抑圧要因として作用するといえる。

それゆえ多くの同性愛者は、家族にカミングアウトしない。家族へのカミングアウトを回避する同性愛者の姿は、定位家族との関係性を必ずしも主題としない同性愛研究においても報告されている(神谷 2017: 71-2; 虎岩 2021: 94-7)。また、カミングアウトしたことで家族の異性愛規範がかえって強化された場合もあるという(Khor and Kamano 2013)。ここで重要なことは、多くの人にとって家族は第一次社会化のアクターであるのみならず、大人になっても長きにわたって関わり続ける存在であることである。家族へのカミングアウトを回避する同性愛者にとって、親へのカミングアウトは相手との関係性変容のリスクを孕むものとして意識されるのであろう。したがって、家族と同性愛アイデンティティの関係性としては、異性愛規範にもとづき同性愛アイデンティティを否定する作用が中心的に検討されてきたといえる。

2.2. 学校におけるアイデンティティの抑圧

続いて、学校と同性愛者に関する経験的研究について検討する。家族と並んで学校は重要な社会化の装置であるが、家族同様、アイデンティティに否定的に作用する側面が強調されてきた。

教育学者は、若年同性愛者が学校で諸困難に直面することを指摘してきた。小宮明彦は、学校において同性愛者が直面する困難を「自己受容の困難」「自己開示の困難」「自己イメージの困難」「事故回避の困難(思いがけず悪い出来事に遭遇する可能性が高く、それを避け難いこと)」の4つに整理する(小宮 2001)。後続研究としては、杉山貴士が小宮(2001)の示した4つの困難に「情報アクセスの困難」を追加し、「自己開示の困難」を「自己開示・人間関係づくりの困難」に発展させている(杉山 2006)。眞野豊はさらに、上述した5つの困難に「修学上の困難」「相談場所の不在」「心身の安心・安全保障の困難」の3つを追加する(眞野 2020: 95)。さらに、学校内で男子生徒からの性暴力被害を受ける男性同性愛者の事例(大島 2016: 97-104)や、「男らしくない」ことを理由に学校でいじめられる男性同性愛者の事例(丸井 2020: 147-8など)も報告さ

れている。

若年同性愛者が諸困難に直面する背景には、学校の構造的な要因がある。たとえば小宮は、学校で同性愛者を抑圧する規範として「ヘテロセクシズム（異性愛に排他的価値を置く主義）とホモフォビア（同性愛を忌避・嫌悪する心的態度）」、「セクシズム（性差別主義）とジェンダー規範」を特定し、これらは双方が互いの規範を支持し合う「正の相関関係にある」と分析する（小宮 2000: 108）。また、今井貴代子と山田公二は、「セクシュアルマイノリティの存在を『見えない』ものにとどめながらも、『見える／現れる』ときには『異常』として位置づけ、排除されるべき対象としていく」（今井・山田 2008: 120）作用から、学校内における同性愛の可視化／不可視化のメカニズムを説明する。ほかに、社会福祉学の観点から性的マイノリティのパワー減退につながる学校の要因（寺田 2020: 129-32）や、性的少数者の子どもたちに負の影響を与える学校の構造的要因（丸井 2020: 151）が指摘されている。

構造的要因ゆえ学校内で諸困難に直面する若年同性愛者にとって、学校外の間人間関係はアイデンティティ受容に重要な役割を果たす。杉山（2006: 72-3）は、主にゲイ男性が性行為の相手を求めて集まる「ハッテン場」での聞き取り調査から、学校内で他の同性愛者と出会えない高校生のゲイ男性が、出会いを求めてハッテン場に赴く実態を明らかにしている。また渡辺大輔は若年ゲイ男性の学校内外の間人間関係をインタビュー調査によって聞き取り、学校内で困難に直面してきたゲイ男性が、学校の外に他の同性愛者との人間関係を求め、そこでの出会いを通じて自己受容していく姿を明らかにしている（渡辺 2005, 2010）。このように、若年同性愛者が学校外の同性愛者同士のつながりを通じてアイデンティティを受容する姿が、これまでの研究において確認されてきた。次項では、その同性愛者同士のつながりの場である同性愛コミュニティに焦点化した研究動向を整理する。

2.3. 同性愛コミュニティにおけるアイデンティティの受容

本項では同性愛コミュニティをテーマとする研究についてみていく。なお、同性愛コミュニティはさまざまなレベルで定義できるが、本稿は同性愛コミュニティに焦点を当てた研究を幅広くレビューの対象とするために、包括的な定義である「日常生活のなかでは“生き難さ”を抱えた人々が、日常生活の〈外側〉に求めていった上で、選び取り、形成してきた集合体」（堀

江 2008: 85）を採用する。

社会運動の文脈では、ゲイ・アイデンティティとゲイ・コミュニティは深く結びついてきた。日本では〈病理〉や〈趣味〉の問題として長らく考えられてきた同性愛だが、ゲイ当事者団体である「動くゲイとレズビアン」の会は1990年代に、「生まれついでのもの」という選択不可能性を中心に据える〈性的指向フレーム〉を導入した（砂川 2015: 276-8）。文化人類学者の砂川秀樹によれば、このとき同性愛が選択不可能なものとなったことは、「ちょうど血縁・地縁において非選択感がある種の運命共同体的な感覚を生じさせるのと同じように、〔男性同性愛者同士の：引用者注〕仲間意識を強化させる」（砂川 2015: 278）役割を果たした。すなわち、選択不可能なものとしてのゲイ・アイデンティティという発想が、ゲイ・コミュニティのひとつの土台を形成してきたという。

また、同性愛コミュニティを基盤に形成される運動的アイデンティティについても研究が蓄積されてきた（飯野 2008; 堀江 2015; 堀川 2016; 杉浦 2019; 齊藤 2019, 2021）。たとえば飯野由里子は、日本のレズビアン運動の言説を整理し、レズビアンが「レズビアン」カテゴリーを通じて連帯し、集団的アイデンティティとしての〈わたしたち〉を構成しようとしてきたと分析する（飯野 2008）⁽³⁾。さらに齊藤巧弥は、北海道札幌市における同性愛者による社会運動を検討し、運動の担い手が「ゲイ」や「レズビアン」を軸としたアイデンティティ・ポリティクスを展開していたことを明らかにした（齊藤 2019）。またゲイ男性を主要読者として想定するゲイ雑誌（前川 2017; 齊藤 2018; 茹 2023）や HIV / AIDS の予防・啓発活動を行う拠点としてのゲイ・コミュニティ（新ヶ江 2013）が、男性同性愛者のアイデンティティ形成に独自の役割を果たしてきたことも分かっている。

ところで、同性愛コミュニティは運動的アイデンティティが形成される場であるだけではない。前項でみたように、同性愛者が他の同性愛者と出会い、関係を構築する場としての機能もある。この機能とアイデンティティとの関係性について検討した初期の研究が砂川（2003）である。砂川は、新宿二丁目のゲイバーにおけるフィールドワークから、ゲイバーを初めて利用したゲイ男性は「普通の人がたくさんいるということに安心した」（砂川 2003: 212）といった意識を抱くことが多いとし、ゲイバーが「ゲイとしての『アイデンティティ』を生産する場としての役割を果たしていることは確かであろう」（砂川 2003: 213-4）と指摘する。

同性愛コミュニティを通じて同性愛者がアイデンティティを受容する機能は、他の経験的研究においても確認されている。地理学者の須崎成二は新宿二丁目に通うゲイ男性へのインタビュー調査から、ゲイ・コミュニティが「ゲイ男性同士の交流を深めるだけではなく、ゲイ・アイデンティティの表現、言い換えればゲイである自分を表現できる場として機能している」（須崎 2019: 77）ことを明らかにする。レズビアン／バイセクシュアル女性についても、レズビアン・コミュニティに参加することが精神的健康や自尊心の向上につながるということが実証されている（三宮 2014）。同性愛コミュニティがアイデンティティの肯定的受容につながるという見解は、このように多くの研究によって支持されている。

2.4. 小括——「各社会空間におけるアイデンティティの抑圧／受容」という視座の限界

ここまでの議論をまとめよう。本節では、同性愛者を取り巻く環境とアイデンティティの関係についていかなる検討が行われてきたのかを分析した。同性愛者は定位家族のなかでロールモデルを見つけられず、学校は諸困難に直面する場であることから、他の同性愛者と容易に出会える同性愛コミュニティが、アイデンティティの受容に際して重要な場となる。このように、学校と家族が同性愛者のアイデンティティを抑圧する側面が強調され、同性愛コミュニティがアイデンティティ受容を促進する機能を有すると主張されてきた。なるほどアイデンティティが疎外される学校・家族と、アイデンティティが肯定される同性愛コミュニティという関係性は、同性愛者が同性愛者だけで集う場所や人間関係を「こっちの世界」、異性愛者を中心として編成される学校や家族、職場を「あっちの世界」

と呼ぶ用語法にも端的に表れている（石丸 2008: 61-96）。

しかし、こうした社会空間の捉え方は一面的であるとして、修正を迫る経験的研究が近年登場している。たとえばカミングアウトをした同性愛者とその親の関係性に焦点化した家族社会学的研究（Khor and Kamano 2013; 三部 2014; 元山 2014, 2017）は、同性愛者のアイデンティティを単に抑圧するだけではない、同性愛者を理解し、アイデンティティの受容を支援する家族像を提示する。また、抑圧性が強調されてきた学校においても、近年は若年同性愛者の学校内におけるアイデンティティ形成の実態が研究されている（鳥袋 2022b）。同性愛コミュニティをめぐっては、ゲイ・アイデンティティとゲイ・コミュニティの結びつきが希薄化しているという現状分析（森山 2012）⁽⁴⁾がある。これら一連の対抗的知見を含めた研究動向をまとめたのが表1であるが、近年の研究知見を踏まえれば、同性愛コミュニティのみをアイデンティティ受容の場とする議論には限界があるだろう。

また、本節で検討した諸研究が、各社会空間において立ち現われる同性愛アイデンティティを断片的にし、か検討してこなかったことも課題である。同性愛者は一つの社会空間にのみ所属しているわけではなく、複数の社会空間を行き来しながら生活し、アイデンティティを形成している。しかし、学校やコミュニティなどの各社会空間が同性愛者のアイデンティティ受容に果たす機能の解明に研究者が焦点を当ててきた結果、各社会空間を横断して生活する同性愛者個人に焦点化し、その個人のアイデンティティが形成される過程に着目する研究は限られている⁽⁵⁾。

以上2つの課題を踏まえると、同性愛者個人の意識から出発してアイデンティティを捉える研究設計の有

表1 同性愛者を取り巻く場とアイデンティティの関係に関する研究動向

	定位家族	学校	同性愛コミュニティ
主要な研究領域	心理学, 家族社会学	教育学, 社会福祉学	文化人類学, 社会学, 地理学
中心的なテーマ	・異性愛家族におけるロールモデルの不在 ・家族へのカミングアウト	・学校で直面する諸困難 ・学校内外の人間関係	・運動的アイデンティティの形成 ・他の同性愛者と出会う場
主な知見	・アイデンティティが抑圧される場 ・カミングアウト後の親子関係の変容	・アイデンティティが抑圧される場 ・学校内でのアイデンティティ形成の可能性	・アイデンティティを肯定的に受容する場 ・同性愛コミュニティとアイデンティティの結びつきの希薄化

出典：筆者作成

効性が浮かび上がってくる。次節で検討する、主に心理学において展開されてきた同性愛アイデンティティ形成研究は、同性愛者のアイデンティティへの意識から議論を出発させる点で、上述した課題に応える研究設計として期待される。

3. 同性愛アイデンティティ形成研究の視座とその限界

本節では、同性愛アイデンティティ形成（Homosexual Identity Formation, 以降 HIF）研究をレビューする。HIF 研究は1980年代頃から海外で盛んに展開され、日本でも多くの蓄積がある。そこで、日本の同性愛研究のレビューという目的からは逸れるが、HIF 研究として有名な Cass (1979, 1984) と Troiden (1989) について、はじめに簡単に紹介する。

まず Cass は同性愛者に対する臨床実践にもとづき、HIF を①アイデンティティの混乱、②アイデンティティの比較、③アイデンティティの寛容、④アイデンティティの受容、⑤アイデンティティへの誇り、⑥アイデンティティの統合という6段階のモデルで説明した（Cass 1979）。この6段階モデルをめぐっては、のちに Cass (1984) が質問紙調査の結果を用いて検証し、第1段階と第2段階、第5段階と第6段階には明確な差異がないことを示唆している。

より社会的な視座から HIF の過程を検討したのは、Troiden (1989) である。Troiden は、①鋭敏化（同性愛感情にもとづくものとのちに解釈される事項を経験する段階）、②アイデンティティの混乱、③アイデンティティの受容、④コミットメントの4段階のモデルで HIF を整理した。このように HIF 研究は、アイデンティティの発達段階モデルにもとづき、同性へのセクシュアリティを自覚した同性愛者が混乱を経なが

らもアイデンティティを受容する過程を描いてきた。

日本における HIF 研究の嚆矢としては、精神病理学者の及川卓が1981年に発表した「同性愛者アイデンティティの形成過程」（及川 [1981] 2016）がある。及川は約60の男性同性愛者の症例を踏まえ、HIF の過程を以下の5段階のモデルで説明する。すなわち、①同性愛傾向にめざめ、混乱する段階、②同性愛傾向と社会規範としての異性愛との間で葛藤と緊張とが生ずる段階、③自分が同性愛者であることを“ひとまず受容する”、あるいは“受容せざるをえない”段階、④同性愛者としての生き方や在り方を強調することで、同性愛者としての自分の人生に何らかの価値や意義を付与しようとする段階、⑤《同性愛者アイデンティティ》の心理的再統合と再建が求められる段階、の5段階である（及川 [1981] 2016: 134-5）。及川 ([1981] 2016) は Cass (1979) などを直接引用してはいないが、同様と思われる視座から HIF を分析した、日本における先駆的研究である。

1990年代以降は、HIF 研究の視座が日本にも本格的に導入され、心理学者を中心に研究が盛んになる。堀田香織は、上述した及川の議論は「〔同性愛の:引用者注〕治療的有効性のためにまとめられたものである」（堀田 1998: 17）と批判する⁶⁾。そして、Cass (1979, 1984) や Troiden (1989) を紹介したうえで、堀田が実際に面接した二人の同性愛男子大学生の事例を検討し、HIF 過程を「混乱期」「混乱から受容へ」「受容期」の三段階にまとめている（堀田 1998）。ほかにも、女性同性愛者がいかにセクシュアリティを受容するかを検討した梶谷 (2008) や、カウンセラーの立場から同性愛者のセクシュアリティ受容のプロセスを描き出した宮腰 (2012, 2013)、男性同性愛者・両性愛者の性的目覚めから性的指向の開示の過程を検討した高藤・岡

表2 同性愛アイデンティティ形成モデルの整理

Cass	Troiden	及川	堀田
	鋭敏化		
混乱 比較	混乱	めざめ・混乱 葛藤	混乱期
寛容			混乱から受容へ
受容	受容	受容	受容期
誇り 統合	コミットメント	同性愛の価値・ 意義付与 再統合・再建	

出典：筆者作成

本(2017)などがあり、HIF研究は心理学の分野で盛んに展開されてきたといえる。

ここまで検討してきたHIF研究の多くは、単一的な発達段階モデルを構成している。本節で取り上げた一連の研究のなかでも、近年も引用され続けている重要な研究であるCass(1984)、Troiden(1989)、及川([1981]2016)、堀田(1998)の提唱したモデルを一覧で示したのが、表2である。これを確認すると、各モデルの用語の違いやモデルの開始点・終着点の違い(Troiden(1989)のモデルがアイデンティティを自覚する前の段階を含み込んでおり、また及川([1981]2016)が受容のあとに再統合・再建の段階をモデルに組み込んでいる)がありつつも、4つのモデルが共通して「混乱・葛藤から受容へ」という流れを経ていることが分かる。HIFのモデルは、各研究者の研究領域や焦点の違いはありつつも、「混乱・葛藤から受容へ」という流れを辿ることは共通認識となっている。

しかし、まさにこの「混乱・葛藤から受容へ」という流れが自明視される点に、HIF研究の限界が存在する。HIFの発達段階モデル的発想をめぐっては、自覚された同性愛の性的指向が自己の中核的アイデンティティに統合されることを理想化し、それ以外の同性愛アイデンティティを非正統的なあり方として位置づけてしまうという批判がある(Horowitz and Newcomb 2002: 10)。ゲイ男性について調査したConnell([1995]2005=2022: 211)も、HIF研究の発達段階モデルが依拠する均一なアイデンティティよりも、実際のゲイ男性のアイデンティティ形成は複雑であると示唆する。同性愛アイデンティティ形成研究という研究テーマ名に端的に現れているように、HIF研究においては、同性愛者が葛藤や戸惑いを経ながらも最終的には同性愛という単一のアイデンティティ獲得に辿り着くことが自明視されている。そのため、同性愛者個々人のアイデンティティの意識の多様性を検討できない。

また、HIFを単線的な図式で描くことに対する疑問も挙げられている。実際、現行の「段階的モデル」よりも、自己受容と否定を繰り返す「螺旋モデル」の方がよりよく説明できるのではないかという示唆(宮腰2012: 75)がある。また、自身のセクシュアリティを自覚した際に戸惑いなく受容した男性同性愛者の事例報告(眞野2014: 77)や、従来の発達段階モデルでは説明できない複雑なHIFの語り(田中2021)が報告されており、同性愛者の自己形成過程を一つのモデルで説明しようとする姿勢は、こうした複雑な実態を説明できない。発達段階モデルに対するこうした異論は提出されているものの、それに代わる有効な研究設計は

日本ではいまだ提示されていない。したがって、現在の日本の同性愛アイデンティティ研究においては、同性愛者のアイデンティティの意識の多様性や同性愛集団内の差異を取り逃さない研究設計が求められているといえる。

4. 同性愛者のセクシュアル・アイデンティティ形成研究の可能性

前節で検討したHIF研究は、同性愛者が単一的な経路をたどって最終的には同性愛アイデンティティを受容することが自明視され、アイデンティティの多様性や形成プロセスの流動性を等閑視してきた。本節では、この課題を乗り越える視座を提供すると期待される研究設計として、同性愛者のセクシュアル・アイデンティティ形成研究の可能性を検討する。

「セクシュアル・アイデンティティ」概念の射程を設定した初期の研究として、Laura Reiterの議論が挙げられる。臨床ソーシャルワーカーのReiterによれば、同性愛者の性的指向は幼少期に確立され、「性的欲求は揺れ動くかもしれないが、常に特定のポイント、つまり〔性的：引用者注〕指向を主な基準としている」(Reiter 1989: 141)という前提が多く同性愛研究者によって採用されてきた。しかし、異性愛を前提とし、同性愛に対するスティグマの強い社会においては、性的指向が幼少期に確立しても、同性愛者のアイデンティティ形成は流動的なものになる。主要な性的ファンタジーが男性に関するものであるレズビアンと、ゲイを自認しながらも女性への性的魅力を自覚するゲイ男性のケースを紹介するReiter(1989: 146-8)は、性的指向の固定性という前提がこうした同性愛者のあり方を否定的に評価することにつながることを懸念していると考えられる。

こうしたケースを踏まえてReiterは、性的指向とセクシュアル・アイデンティティを峻別する視座を提案する。前者は本質的で変更不可能なものである一方、後者は選択に開かれたものであり、両者は一致することもあれば一致しないこともある。この認識を導入することで、性的指向とセクシュアル・アイデンティティが一致しない自己認識を訴える同性愛者についても、同性愛者のアイデンティティのあり方の一つとして理解することが可能となる。

自我異質的な感情を、〔性的：引用者注〕指向に疑問を持ち「変えよう」とする機会としてではなく、むしろゲイのアイデンティティ発達の標準的な段階の一部として捉えることは、〔性的：引用者注〕

指向が初期の固定的な性心理の結果であるという見解を支持する研究、およびソーシャルワークが多様性を受け入れることと一致する。一方、セクシュアリティに対する真の混乱に悩む依頼者もいる。そのような依頼者には、その混乱のあらゆる側面を探る機会が与えられてしかるべきである。ある依頼者にとっては、〔性的：引用者注〕指向と〔セクシュアル・：引用者注〕アイデンティティの一致という結果が得られるかもしれない。他の依頼者にとっては、結果は〔性的指向とセクシュアル・アイデンティティの：引用者注〕不一致となるかもしれない。すべての結果は、依頼者の真の選択であるならば、セラピストによって支持されなければならない。（Reiter 1989: 149）

「性的指向」と「セクシュアル・アイデンティティ」の二項区分にもとづき、後者の形成過程に焦点を当てるといふ方針は、臨床ソーシャルワークの枠を超えて、同性愛者のアイデンティティ研究において広く採用されている（Roseborough 2004; Huston 2016など）⁽⁷⁾。こうした議論の結果、セクシュアル・アイデンティティ概念は、「性的指向に関する個人の自己同一化」（Dembroff 2016: 6）、「自分の性的指向に関する特定の信念をもち、恐らくは特定の文化的コミュニティに同一化すること」（Diaz-León 2017: 232）などと定義されており、同性愛者の性的指向に関する当人の理解や意識に焦点化する概念として参照されている。性的指向の固定性⁽⁸⁾を前提としたうえで、その性的指向をめぐる当人の主観や解釈を問うのが、セクシュアル・アイデンティティ概念である（Andler 2021）。

性的指向とセクシュアル・アイデンティティを区別し後者に注目するという方針は、特に若年同性愛者のアイデンティティを検討する際に有用となる。というのも、性的指向の変更不可能性という想定は、アイデンティティ形成の最中を生きる若年同性愛者の意識を検討できないからである。歴史学者の John D'Emilio は、資本主義がゲイ・アイデンティティの形成に寄与した側面を明らかにした研究で、性的指向の変更不可能性を強調する主張を批判する（D'Emilio 1983=1997: 154-6）。その批判のなかには、次のような一節がある。

私たちは、同性愛者になるのは同性愛者だけなので私たちを受け入れても心配はない、という安易な弁護論に陥ってはならない。少数者集団としての分析や市民権を求める戦略などは、意味を持つとしても、せいぜい私たちの間で既にゲイである

人々にしか関わりえない。そのような分析や戦略が存在するだけでは、いまだレズビアンまたはゲイ男性に「なりきって」いない今日の青少年たち——明日のレズビアンとゲイ男性——は、一生をかけてもそれから逃れられない異性愛主義的なモデルを内面化するがままになってしまうのである。（D'Emilio 1983=1997: 154）

この一節は、同性愛者の性的指向の本質性がセクシュアル・アイデンティティにまで波及するとき、セクシュアル・アイデンティティ形成の最中にある同性愛者の若者が議論から排除されてしまう隘路として理解できる。このように性的指向の変更不可能性を強調する同性愛者観は、アイデンティティの形成途上にある青少年の同性愛者の実態を説明できない⁽⁹⁾。

実際、若年同性愛者のセクシュアル・アイデンティティ形成に着目する近年の計量研究は、研究対象内の差異や多様性に焦点化している（Rosario et al. 2006; Katz-Wise 2014など）。また、研究対象の性的流動性をインタビュー調査によって明らかにする試みも多い（Savin-Williams and Diamond 2000; Diamond 2008など）。同性愛者のセクシュアル・アイデンティティ形成研究はこのように、同性愛者のアイデンティティへの意味づけが時間的推移を経て変化するかどうかを問うことが多い。

前節で指摘した HIF 研究の課題を踏まえると、日本においてもこの視点を導入した研究は有効である。本節で紹介した Reiter（1989）をはじめとする諸研究を直接引用しているわけではないが、同様と思われる関心から「セクシュアル・アイデンティティ形成過程」に着目した数少ない先例として、杉浦郁子による研究（杉浦 2003）がある。杉浦は、あるレズビアン女性が自身の同性への性的指向を自覚し、レズビアンとして自己規定するまでのライフストーリーを、「『同性愛／異性愛』の差異を認識するというプロセス」と「その差異を用いて自らを定義するというプロセス」（杉浦 2003: 145）の2つの側面から描いた。その結果、自身のセクシュアリティを流動性や可変性をもって受け止め、選択的な営為として「レズビアン」カテゴリーを引き受ける研究参加者の姿を描き出した。

こうしたアイデンティティの選択や可変性の意識は、「アイデンティティの受容」を規範的な到達点に設定する同性愛アイデンティティ形成研究では検討できないだろう。杉浦は、自身の研究で明らかになったストーリーを、「異性愛社会において自分は異性愛者だと当たり前にも思いこんでいた者が、長じて自らの『本

質』に気づいていくといったような気づきのストーリー、『本当の自分』を確かなものとして獲得したストーリーと見なすべきではない」(杉浦 2003: 156)と指摘する。同性愛者が同性愛アイデンティティを受容するという帰結を自明視したHIFの発達段階モデルに依拠するのではなく、セクシュアル・アイデンティティ形成という研究設計に依拠することで、同性愛者個々人が「同性愛者であること」を意味づける過程とその意味づけの流動性や多様性を描くことができる。

5. 結語

本稿は、同性愛者のアイデンティティに関する経験的研究を領域横断的にレビューした。まず、社会空間と同性愛をテーマとする研究は、学校や同性愛コミュニティなどの社会空間が同性愛者のアイデンティティ受容にどのような機能を果たすのかを分析してきた一方、各社会空間において立ち現われる同性愛者のアイデンティティを断片的にしか描いてこなかったことを確認した。次に、HIF研究においては、同性愛者個々の意識に焦点化してきた一方で、アイデンティティの形成過程が単一的に描かれ、アイデンティティ形成の多様性や形成プロセスの流動性が見落とされてきたことを指摘した。最後に、同性愛者のセクシュアル・アイデンティティ形成研究が、性的指向とセクシュアル・アイデンティティを区別し後者に着目することで、同性愛者個々人が「同性愛者」としての自己を理解する過程を、多様性や流動性を前提に分析することが可能であることを示した。

本稿が最終的に有用な研究設計として提案した「同性愛者のセクシュアル・アイデンティティ形成」研究は、以下のように定式化できよう。特定の社会空間における同性愛者のアイデンティティの抑圧／受容に焦点化するのではなく、同性愛者個人の意識から出発し、本人が自身の性的指向を自覚し、それを意味づける過程を分析する。そして、「同性愛アイデンティティの受容」という帰結や形成過程の単一的モデルを自明視するのではなく、セクシュアル・アイデンティティの流動性や多様性を前提とし、同性愛者個々人の主観的意味世界に焦点を当てる。このような研究設計にもとづくと思われる研究は、日本では杉浦(2003)などいまだわずかである。今後の展望としては、この研究設計にもとづく実際の調査の実施と分析を行うなかで、具体的な課題や問題点に対処し、研究設計をその都度改善していくことである。

本稿の限界としては、バイセクシュアルやトランスジェンダー、アセクシュアル(他者への性的惹かれを

経験しない人)など、他の性的マイノリティに着目した研究をほとんどレビューできなかった点が挙げられる。本稿は同性愛研究のみにレビュー対象を絞ったが、幼少期のアイデンティティ発達は流動性を前提として検討する必要性が近年提起されている(森山 2022)。幼少期の場合、同性愛者と他の性的マイノリティは、明瞭には分け難いことが多い。実際、トランスジェンダーやXジェンダー(男性/女性いずれにも属さない性自認を生きる人)を対象とした研究では、性別違和を自覚した当事者がしばしば、はじめは自分が同性愛者なのではないかと思うと報告されている(宮田 2017; 佐川 2023)。近年同性愛以外の性的マイノリティや性的マイノリティ全般を対象とした研究が増加しつつあることを踏まえれば、今後はより包括的なレビューの試みが必要であると考えられる。

謝辞

本稿はJST及び名古屋大学による名古屋大学融合フロンティアフェローシップの支援を受けたものです。この場を借りて御礼申し上げます。

〔注〕

- (1) 本稿が着目する「経験的研究」とは、大谷(2019: 27-8)の定義する経験科学、すなわち何らかのデータを用いて実施する(量的・質的研究のどちらも含む)研究のことを指す。
- (2) 新ヶ江章友によれば、「家族とセクシュアル・マイノリティ」に焦点化した研究は、「定位家族との関係」と「新たに作っていく『家族』」の二つに大別することができる(新ヶ江 2022: 7)。後者の研究群においては、同性愛者のアイデンティティの受容と「家族」がいかに関わっているのかは検討されず、家族形成とアイデンティティの受容とはむしる関連がないと指摘されてきた(柳原 2007; 牟田ほか 2021: 130-1)。したがって本稿では、定位家族と同性愛をテーマとする研究のみを取り上げる。
- (3) ただし、飯野(2008)の描いてきたストーリーをめぐっては、「『差異』の検証より『わたしたち』という作業仮説の擁護の方を優先していると言わざるを得ない」(新田 2009: 140)という指摘もある。
- (4) ゲイ男性のつながりを歴史的に検討した森山至貴は、インターネットを介した出会いが登場したことで、現在のゲイ男性はゲイ・コミュニティを経由せず他の同性愛者と出会うことが可能となると分析する(森山 2012: 46-51)。さらに森山によれば、1990年代までゲイ・コミュニティとゲイ・

アイデンティティの形成は深く結びついていて、
「現代においては、ゲイ男性のアイデンティティ
とゲイ男性のつながりの理想状態としてお互い
がお互いを支える図式は成り立たない」（森山 2012:
138）。他方で須崎（2019: 77-8）は、オンライン・
ツールを用いたゲイ男性同士の新たなつながりの
創出が、新宿二丁目のゲイバー利用を妨げるわけ
ではないと調査結果から示唆している。ただし、須
崎（2019）は首都圏居住の調査協力者の新宿二丁
目へのアクセスの有無を問わないとしつつも、ス
ノーボールサンプリングを募集方法として採用し
ており、新宿二丁目やゲイバーに対して似た価値
観をもつ調査協力者が集められた可能性に留意す
る必要があるだろう。

- (5) 同性愛コミュニティを家族や学校の外部社会と比較してアイデンティティ受容の場として位置づける同性愛者の姿は、教育学研究や同性愛コミュニティ研究において検討されてきたが、そうした研究では「外部社会」が一枚岩的に指定されることが多い。学校一つをとっても、小・中・高校と大学とでは、同性愛者を取り巻く環境が大きく異なることは容易に想像できる。しかし、同性愛者の学校経験に着目してきた研究は高等学校までの経験に着目することが多く、大学進学後の経験も含み込んだ分析を展開した研究は、杉田（2023）などのわずかな先例を除いてほとんどない。
- (6) ただし及川はゲイ・ライターの伏見憲明との対談で、「私としては、同性愛を、“医学的・病理学的な意味での治療対象と”見なしたことは、一度としてない」（及川 2016: 122）と宣言しており、同性愛の治療の有効性を考えたことはなかったと述べている。この背景には、及川自身の臨床実践をめぐる経験が関与していると思われる。いわく、精神病理学においては、同性愛の性対象選択の変更や異性愛の内面化を目指す治療を展開する《治療的積極主義》が長らく支配的な価値観だったというが、この《治療的積極主義》から抜け出さない限り、ほとんどの同性愛者が精神療法関係を中断したりドロップアウトしたりしてしまう現実に、及川は繰り返し直面したという（及川 2016: 98）。なお、精神医学における同性愛研究の世界的動向と日本の展開のレビューとしては、稲場・Kimmel（1995）。
- (7) なかには、性的指向とセクシュアル・アイデンティティの区別を採用せず、「性的指向アイデンティティ（Sexual Orientation Identity）」概念を採用する研究もある（Floyd and Stein 2002など）。

- (8) 近年、同性愛者の性的指向が変化する事例や性的指向の選択という問題について、積極的に検討する動きもある（Beckstead 2012; Díaz-León 2017など）。
- (9) 風間孝は、性的指向が「主観的要素、言いかえれば自認するという要素を含みこむことで成り立っている」（風間 2018: 61）と指摘する。しかし、本稿2節で検討した砂川（2015: 276-8）の整理でみたように、性的指向概念は同性愛者のあり方を「医学の病理モデル」から「変更不可能な属性モデル」へ移行させる政治的効果を企図して導入された。それゆえ、変更不可能性という想定が組み込まれた性的指向概念のもとでは、主観的要素があるとしても、同性愛者であることを受容するか同性愛へのスティグマゆえ拒否するか、という二項対立的図式でしか同性愛者の主観や自認のプロセスを描くことができない。なお、本質主義的な意味づけのもと日本に導入された性的指向概念が、性的マイノリティ当事者に批判的に受容される過程で、性の個別性の理解を可能にした過程については、武内（2022）参照。

【参考文献】

- Andler, Matthew, 2021, “The Sexual Orientation/Identity Distinction,” *Hypatia*, 36(2): 259-75.
- 有馬将太・園田直子, 2010, 「同性愛者のセクシュアリティ——研究の視点と展望」『久留米大学心理学研究』9: 89-97.
- Beckstead, Lee, A. 2012, “Can We Change Sexual Orientation?” *Archives of Sexual Behavior*, 41, 121-34.
- Berger, Peter, L. and Thomas Luckmann, 1966, *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*, Garden City: Doubleday. (山口節郎訳, 2003, 『現実の社会的構成——知識社会学論考』新曜社.)
- Cass, Vivienne, C. 1979, “Homosexual Identity Formation: A Theoretical Model,” *Journal of Homosexuality*, 4(3): 219-35.
- , 1984, “Homosexual Identity Formation: Testing a Theoretical Model,” *Journal of Sex Research*, 20(2): 143-67.
- Connell, R. W. [1995] 2005, *Masculinities*, second edition, Berkeley, Calif.: University of California Press. (伊藤公雄訳, 2022, 『マスキュリティーズ——男性性の社会科学』新曜社.)

- D'Emilio, John, 1983, "Capitalism and Gay Identity" Ann Snitow, Christine Stansell and Sharon Thompson eds., *Powers of Desire: The Politics of Sexuality*, New York: Monthly Review Press, 100-13. (風間孝訳, 1997, 「資本主義とゲイ・アイデンティティ」『現代思想』25 (6) :145-58.)
- Diamond, Lisa, M. 2008, *Sexual Fluidity: Understanding Women's Love and Desire*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Díaz-León, Esa, 2017, "Sexual Orientation as Interpretation? Sexual Desires, Concepts and Choice," *Journal of Social Ontology*, 3(2): 231-48.
- Dembroff, Robin, A. 2016, "What Is Sexual Orientation?" *Philosopher's Imprint*, 16(3): 1-27.
- Floyd, Frank, J and Terry S. Stein, 2002, "Sexual Orientation Identity Formation among Gay, Lesbian, and Bisexual Youths: Multiple Patterns of Milestone Experiences," *Journal of Research on Adolescence*, 12(2): 167-91.
- 堀江有里, 2008, 「ジェンダー／セクシュアリティとコミュニティ形成——歴史神学的視座からの一考察」『女性学評論』22 : 69-91.
- , 2015, 『レズビアン・アイデンティティーズ』洛北書房.
- 堀川修平, 2016, 「日本のセクシュアル・マイノリティ〈運動〉における「学習会」活動の役割とその限界——南定四郎による〈運動〉の初期の理論に着目して」『ジェンダー史学』12 : 51-67.
- 堀田香織, 1998, 「男子大学生の同性愛アイデンティティ形成」『学生相談研究』19 (1) : 13-21.
- Horowitz, Janna, L. and Michael D. Newcomb, 2002, "A Multidimensional Approach to Homosexual Identity," *Journal of Homosexuality*, 42(2): 1-19.
- Huston, Lola, D. 2016, "Sexual Identity and Orientation," Nancy A. Naples ed., *The Wiley Blackwell Encyclopedia of Gender and Sexuality Studies*, Chichester: Wiley Blackwell, (Retrieved May 24, 2023, Wiley Online Library).
- 飯野由里子, 2008, 『レズビアンである〈わたしたち〉のストーリー』生活書院.
- 今井貴代子・山田公二, 2008, 「学校の中の「見えない／見える」セクシュアルマイノリティ」木村涼子・古久保さくら編著『ジェンダーで考える教育の現在——フェミニズム教育学をめざして』解放出版社, 112-29.
- 稲場雅紀・Douglas, C. Kimmel, 1995, 「精神疾患単位としての同性愛——歴史的展望」『精神科診断学』6 (2) : 157-70.
- 石丸徑一郎, 2008, 『同性愛者における他者からの拒絶と受容——ダイアリー法と質問紙によるマルチメソッド・アプローチ』ミネルヴァ書房.
- 茹岑浩, 2023, 「生き延びるためのセックス実践とアイデンティティ・ポリティックス——初期のゲイ雑誌『ボディ』を通して」『言語社会』17 : 39-57.
- 梶谷奈生, 2008, 「女性同性愛者のセクシュアリティ受容に関する一考察」『心理臨床学研究』26 (5) : 625-9.
- 神谷悠介, 2017, 『ゲイカップルのワークライフバランス——男性同性愛者のパートナー関係・親密性・生活』新曜社.
- Katz-Wise, Sabra, L. 2014, "Sexual Fluidity in Young Adult Women and Men: Associations with Sexual Orientation and Sexual Identity Development," *Psychology & Sexuality*, 6(2): 189-208.
- 風間孝, 2018, 「性的指向をめぐる問題」風間孝・河口和也・守如子・赤枝香奈子著『教養のためのセクシュアリティ・スタディーズ』法律文化社, 53-69.
- Khor, Diana, and Saori Kamano, 2013, "Negotiating Heteronormativity in the Heterosexual Mother-Lesbian Daughter Relationship," *Japanese Journal of Family Sociology*, 25(2): 124-34.
- 小宮明彦, 2000, 「学校におけるヘテロセクシズムを越えるために——日英比較研究からの視座と可能性」『日英教育研究フォーラム』4 : 106-14.
- , 2001, 「同性愛の子どもの実態に関する覚え書き——ゲイ雑誌のテキスト分析を中心に」『学術研究 教育・社会教育・体育学編』49 : 87-104.
- 前川直哉, 2017, 『〈男性同性愛者〉の社会史——アイデンティティの受容／クローゼットへの解放』作品社.
- 眞野豊, 2014, 「同性愛嫌悪の内面化とクローゼットの不在との間——地方に生きるゲイのライフストーリーの考察から」『地球社会統合科学研究』1 : 71-80.
- , 2020, 『多様な性の視点でつくる学校教育——セクシュアリティによる差別をなくすための学びへ』松籟社.
- 丸井淑美, 2020, 「性的少数者の学校生活の実態と学校教育の課題に関する研究——女性同性愛, 男性同性愛, 性同一性障害(性別違和)の当事者インタビュー調査より」『日本健康相談活動学会誌』15

- (2) : 143-52.
- 宮腰辰夫, 2012, 「セクシュアルマイノリティを生きるということ——同性愛者がセクシュアリティを受け入れるプロセス」『大正大学カウンセリング研究所紀要』35 : 63-77.
- , 2013, 「セクシュアルマイノリティを生きるということ——カミングアウトとコミュニティをめぐる危機と回復について」『大正大学カウンセリング研究所紀要』36 : 39-52.
- 宮田りりい, 2017, 「性別越境を伴う生活史におけるジェンダー／セクシュアリティに関する意識」『教育社会学研究』100 : 305-24.
- 森山至貴, 2012, 『「ゲイコミュニティ」の社会学』勁草書房.
- , 2022, 「性的少数者」日本発達心理学会編『発達科学ハンドブック 11 ジェンダーの発達科学』新曜社, 68-81.
- 元山琴菜, 2014, 「「カミングアウトされた家族」から〈非異性愛者をもつ家族〉になることとは——「家族崩壊」に対応する母親役割に着目して」『家族社会学研究』26 (2) : 114-26.
- , 2017, 「日本における非異性愛をカムアウトされた家族の受け容れ方——差別への働きかけとしての〈ふつう戦略〉とその可能性」『理論と動態』10 : 24-41.
- 牟田和恵・岡野八代・丸山里美, 2021, 『女性たちで子を産み育てるとのこと——精子提供による家族づくり』白澤社.
- 新田啓子, 2009, 「書評 飯野由里子『レズビアンである〈わたしたち〉のストーリー』生活書院, 二〇〇八年」『女性学』16 : 136-40.
- 及川卓, 1981, 「同性愛者アイデンティティの形成過程」精神病理懇話会宝塚口頭発表. (再録 : 2016, 「同性愛者アイデンティティの形成——Homosexual Identity Formation」『ジェンダーとセックス——精神療法とカウンセリングの現場から』弘文堂, 132-44.)
- , 2016, 『ジェンダーとセックス——精神療法とカウンセリングの現場から』弘文堂.
- 大島岳, 2016, 「「性的冒険主義」を生きる——若年ゲイ男性のライフストーリーにみる男らしき規範と性」『新社会学研究』1 : 93-118.
- 大谷尚, 2019, 『質的研究の考え方——研究方法論からSCATによる分析まで』名古屋大学出版会.
- Reiter, Laura, 1989, "Sexual Orientation, Sexual Identity, and the Question of Choice," *Clinical Social Work Journal*, 17(2): 138-50.
- Rosario, Margaret, Eric W. Schrimshaw, Joyce Hunter and Lisa Braun, 2006, "Sexual Identity Development among Lesbian, Gay and Bisexual Youths: Consistency and Change over Time," *Journal of Sex Research*, 43(1): 46-58.
- Roseborough, David, 2004, "Conceptions of Gay Male Life-Span Development," *Journal of Human Behavior in the Social Environment*, 8: 29-53.
- 佐川魅恵, 2023, 「「性的な存在」の関係論的形成——恋愛／性愛における違和の経験に着目して」『Gender and Sexuality』18 : 27-50.
- 齊藤巧弥, 2018, 「ゲイ雑誌『パティ』は何を目指してきたのか——編者の言談からみるゲイ・アイデンティティの形成」『年報社会学論集』31 : 24-35.
- , 2019, 「1990年代の「ゲイリブ」におけるゲイとレズビアンとの差異——北海道札幌市における活動を事例に」『ジェンダー研究』22 : 131-49.
- , 2021, 「〈自由な自己主張の場〉としてのセクシュアルマイノリティのパレード——集合的アイデンティティと経験運動の視点から」『新社会学研究』6 : 194-214.
- 三宮愛, 2014, 「女性同（両）性愛者のコミュニティ参加は精神的健康・自尊心にどのような影響を及ぼすか——面接法と質問紙調査法による検討」『女性学評論』28 : 133-61.
- 三部倫子, 2014, 『カムアウトする親子——同性愛と家族の社会学』御茶ノ水書房.
- Savin-Williams, Ritch, C. and Lisa, M. Diamond, 2000, "Sexual Identity Trajectories among Sexual-Minority Youths: Gender Comparisons," *Archives of Sexual Behavior*, 29(6): 607-27.
- 鳥袋海理, 2022a, 「同性愛者のアイデンティティ研究における現象学的アプローチの可能性——本質主義／社会構築主義を越えて」『現象学と社会科学』5 : 91-105.
- , 2022b, 「若年同性愛者のセクシュアル・アイデンティティ形成過程——学校における生徒との相互行為に着目して」『教育学研究』89 (4) : 629-41.
- 新ヶ江章友, 2013, 『日本の「ゲイ」とエイズ——コミュニティ・国家・アイデンティティ』青弓社.
- , 2022, 「特集：性的マイノリティと多様な「家族」」『理論と動態』15 : 7-10.
- 杉田真衣, 2023, 「性的マイノリティの若者の学校体験とその後」『現代思想』51 (4) : 35-42.

- 杉浦郁子, 2003, 「レズビアンであることを選択するまで——ある女性のライフストーリーから」『中央大学社会科学研究所年報』8: 143-58.
- , 2019, 「一九七〇年代以降の首都圏におけるレズビアン・コミュニティの形成と変容——集合的アイデンティティの意味づけ実践に着目して」菊地夏野・堀江有里・飯野由里子編著『クィア・スタディーズをひらく 1 アイデンティティ, コミュニティ, スペース』晃洋書房, 15-51.
- 杉山貴士, 2006, 「性的違和を抱える高校生の自己形成過程——学校文化の持つジェンダー規範・同性愛嫌悪再生産の視点から」『技術マネジメント研究』5: 67-79.
- 砂川秀樹, 2003, 「新宿二丁目が照射する異性愛社会」松園万亀雄編著『くらしの文化人類学 4 性の文脈』雄山閣, 196-225.
- , 2015, 『新宿二丁目の文化人類学——ゲイ・コミュニティから都市をまなざす』太郎次郎社.
- 須崎成二, 2019, 「「新宿二丁目」地区におけるゲイ男性の場所イメージとその変化」『地理学評論』92 (2): 72-87.
- 高藤真作・岡本祐子, 2017, 「青年期の男性同性愛者・両性愛者の性的目覚めから性的指向の開示に至るプロセス」『心理臨床学研究』35 (3): 297-303.
- , 2018, 「同性愛者のアイデンティティ発達に関する研究の動向と課題——内在化された同性愛嫌悪・カミングアウトに着目して」『広島大学心理学研究』17: 47-60.
- 武内今日子, 2022, 「「性的指向」をめぐるカテゴリー化と個別的な性——一九九〇年代における性的少数者のミニコミ誌の分析を中心に」『ソシオロジ』66 (3): 21-39.
- 田中将司, 2018, 「日本におけるレズビアン, ゲイ, バイセクシュアル当事者のセクシュアルアイデンティティに関する心理学研究の課題——海外研究との比較による検討」『九州大学総合臨床心理研究』9: 205-16.
- , 2021, 「『古い考えの家』で生まれた20代ゲイ男性のナラティブ」『九州大学総合臨床心理研究』12: 41-6.
- 寺田千栄子, 2020, 『LGBTQ の子どもへの学校ソーシャルワーク——エンパワメント視点からの実践モデル』明石書店.
- 虎岩朋加, 2021, 「非異性愛の女たちと家族との関係——シンガポールと日本のケースの比較」『敬和学園大学研究紀要』30: 87-99.
- Troiden, Richard, R. 1989, "The Formation of Homosexual Identities," *Journal of Homosexuality*, 17(1-2), 43-74.
- 渡辺大輔, 2005, 「若年ゲイ男性の学校内外での関係づくり——学校空間が持つ排除と分断の政治の検討にむけて」『教育学研究』72 (2): 38-47.
- , 2010, 「性的少数者にとっての仲間との出会い」『教育』60 (12): 60-7.
- 柳原良江, 2007, 「「親になること」におけるジェンダーの力学——レズビアン・マザーたちのライフストーリーの語りから」『F-GENS ジャーナル』9: 135-43.

How Has Homosexual Identity Been Examined in Japan? A Cross-Disciplinary Review of Empirical Studies

Kairi SHIMABUKURO*

Identity has always been one of the main subjects in the study of homosexuality in Japan. It is important to know what kind of studies have empirically approached the reality of homosexual identity. However, there have been few attempts to review such empirical studies cross-disciplinary. Therefore, the purpose of this paper is to clarify how homosexual identity has been examined in empirical studies in Japan. This work reviews studies that focus on the relationship between the environment surrounding homosexuals and homosexual identity itself. It also reviews homosexual identity formation studies. This study proposes a new research design meant to overcome the pitfalls of previous studies: a study of sexual identity formation among homosexuals.

The results of this study are as follows. First, while studies focusing on the relationship between homosexual identity and the environment have analyzed how the individual's social space, such as school or the lesbian/gay community, functions in the acceptance of homosexual identity, yet homosexual identity has been traditionally analyzed in a fragmented way regarding these social spaces. Moreover, studies on homosexual identity formation have focused on the process by which homosexuals become aware of their sexuality and come to accept their homosexual identity. However, the process of identity formation is depicted in a singular manner, overlooking the diversity of the individual consciousness and the fluidity of individual identity. Finally, the study of sexual identity formation adopts a distinction between sexual orientation and sexual identity, and this has enabled researchers to depict the process of understanding oneself as a homosexual through temporal transitions.

The study of the “sexual identity formation of the homosexual,” which this paper ultimately regards as a useful research design, can be formulated as follows: Rather than focusing on the repression/acceptance of homosexual identity in a specific social space, we start from the consciousness of homosexuality in youth and examine the process by which young people become aware of their same-sex orientation and come to make sense of it. Instead of accepting a single model of homosexual identity formation based on the “acceptance of homosexual identity,” this analysis is based on the fluidity and diversity of sexual identities and focuses on in-group differences rather than on any commonalities among homosexual groups. There are as yet only a few studies in Japan based on this type of research design. Going forward, research needs to address specific issues and problems of homosexual identity by conducting and analyzing actual surveys built on this research design, while working to improve the research design itself.

* Student, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

